



**プラスチックの
精密加工職人**
藤中産業株式会社



ふじ なか さん ぎょう
藤中産業 株式会社



代表取締役社長
ふじなか まさと
藤中 真人 さん



長年の技術の蓄積と最新設備の
融合による「信頼あるものづくり」

樹脂の精密機械加工を通して、丁寧で高品質なニーズに応える信頼あるものづくりを心がけています。昭和30年の創業以来、プラスチック（樹脂）の切削加工一筋に先人からの熟練した加工技術を駆使し、丁寧で高品質な製品をお客様に提供して参りました。熟練の技術と最新の機械設備を融合させ、さまざまなプラスチック材料のあらゆる工業部品を提供できる体制を整えています。「未来へ繋ぐ今」を大切に、元気企業としてお客様に喜んで頂けるものづくりを社員一同行っております。

- 主な事業内容
プラスチックの切削加工
- 主な取引先（納入先）
産業機械・輸送機器・電子部品・医療機器・建材メーカー

住 所 / 〒570-0006
大阪府守口市八雲西町4-30-20
TEL / 06-6992-2221
FAX / 06-6992-1922
創 業 / 昭和30年4月
設 立 / 昭和60年9月
資本金 / 1,000万円
従業員 / 10名

<http://www.fujinaka-s.co.jp/>

60年以上の歴史に 裏打ちされた技術

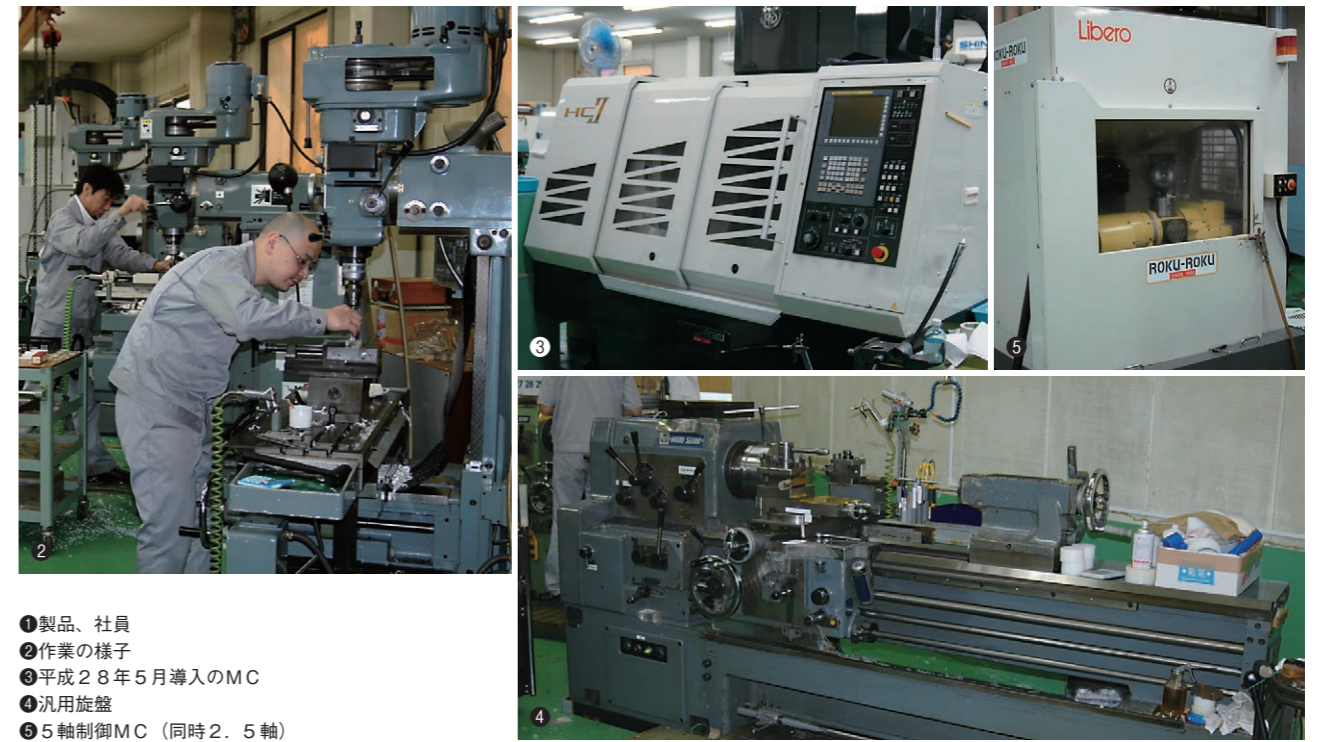
事業内容と沿革

守口移転とともに本格的に樹脂加工へ

「藤中産業」はプラスチックの精密機械加工（切削）を行っている。同社は昭和30年4月に藤中政二氏が大阪市旭区で創業した。当初は紙ファイバーやベークライトの加工を行っていた。その後、昭和36年4月に現在地の大阪府守口市八雲西町へ移転し、旋盤やフライス盤などの機械類をそろえて、樹脂加工を本格的に始めた。昭和60年9月には株式会社として法人設立し、平成17年10月には代表取締役が現在の藤中真人氏が就任した。技術的な評価も高く、平成27年1月には「守口

門真ものづくり元気企業」に認定され、平成28年10月には「大阪府ものづくり優良企業賞」を受賞した。

プラスチックの精密機械加工とともに、現物からの図面起こしも同社が得意とするところだ。また、最新の機械を備えていることから、2次元のデータはもちろん、3次元のCADデータからプラスチック製品を作ることができる。そして、メンテナンス部品の設計製造販売にも力を入れている。



- ① 製品、社員
- ② 作業の様子
- ③ 平成28年5月導入のMC
- ④ 汎用旋盤
- ⑤ 5軸制御MC（同時2.5軸）

強み

あらゆる樹脂精密加工に 取り組む

プラスチックの精密加工に関して、あらゆるノウハウを持っている。まず、40種類以上のプラスチックを取り扱ってきたことで、それぞれの材料に対応してきた実績がある。ここまでの種類を扱う加工業者はあまりないことから、より顧客の幅を広げることにつながっている。また、創業してから60年以上にわたる汎用旋盤、フライス盤職人の加工技術と最新のマシニングセンター（MC）の加工技術を融合することで、高品質なものを最短で製造するノウハウがある。精密加工技術は最小穴径φ0.1mm、その穴ピッチ間の公差は±0.02mmを誇る。

金属加工品に関しても、協力会社と取り組み、同社がワンストップで供給することができる。これは顧客にとって手間とコストを省けるメリットがある。加工品の設計から請け負うことも可能で、コストダウンの提案もできる。

取り組み

顧客に対する 積極的な提案

60年以上の歴史、つまり職人技の積み重ねがある。顧客の要望に応じてきたこともあり、確かな技術力の向上も図ってきた。職人の世代交代もここ10年で進んだが、しっかりと技術継承もできている。さらに最新のMCの導入で3次元加工も可能になった。これにより、あらゆる要望にも応えることができる体制を整えている。

顧客に対する製品設計についての積極的な提案も行っている。樹脂の切削加工の知見を生かし、より良い製品ができるように図面段階から関わるようにしている。図面がなく、現物だけのような場合も、測定をして図面を起こしていく。注文だけ受けるのではなく、プラスαで同社ならではの提案をできるように心がけている。

今後の展開

メンテナンス部品事業に 本格進出

現在は機械部品と試作品がメインだが、これからはメンテナンス部品事業を推進していく。試作品の受注だけではなく、量産が終了したメンテナンス部品として現在は小ロットになった部品の受注を獲得していく。これは不動金型や過剰在庫の防止につながり、成形業者の金型在庫に対する負担軽減にもなる。倉庫に金型が積み上がったまま放置されるような状態もなくなる。

さらに、顧客からの3次元データによる図面提供が増えていることもあり、それに十分対応できるようにしていく。最新の小ロット製造技術に注目し、同社が持っている技術と融合していくことで、「数・精度・価格・意匠」などのニーズに最適な製品を提供できる仕組みを作り上げていくつもりだ。